

## 私の本棚

札幌市医師会  
新さっぽろ小児科

### 守屋 敬純

日本人男性の平均寿命が、81.09歳、ほぼ81歳。その年齢まであと5年を切った現在、そろそろ身辺整理を考えています。いわゆる、「終活」ですが、その秘訣は「断捨離」だと言います。まず最初に行ったのが年賀状の整理でしたが、やや中途半端に終わっています。

私にとって最大かつ難しい整理対象は、なんと言っても「本」です。貴金属はゼロ。衣類は小柄な私のもので、古着屋があつたにしても、また今はやりのネットでさえ売れないでしょう。

私の書斎、というにはみすぼらしい12畳ほどの部屋ですが、そこに似つかわしくない重厚なシステム家具が鎮座しています。その中心は書棚ですが、今や納まりきれずに部屋中にあふれ出しています。それ以外にすぐ横にスライド式の書棚があり、それも満杯。さらに寝室やかつての子ども部屋にも書棚が並んでいます。

医学書、特に学生時代の教科書類は、とうの昔に整理しました。私の担当科は小児科ですが、関連の雑誌も古紙回収業者に持って行ってもらいました。捨てた医学書で、今でも失敗したと思っているものが一つだけあります。それは「解剖学」の3分冊です。

そんなに整理しながらなぜ本棚があふれるのかと言いますと、子どもの頃からの習性みたいなものでしょう。兄たちの読書傾向に影響を受けたのもあります。岩波文庫の欧米の作家の作品を中学時代から読みあさっていました。小学校時代は、図書館にあった子ども用に編集された「ルパン」や「ホームズ」「巖窟王（モンテ・クリスト伯）」「ああ無情（レ・ミゼラブル）」「三銃士」などに一喜一憂していました。中学から高校にかけて読んだ本の中で一番印象に残っているのは、ロマン・ローランの「ジャン・クリストフ」とロジェ・マルタン・デュ・ガールの「チボー一家の人々」です。

大学に入ってからには金銭的に余裕がなく、その頃買った本は僅かしかありません。先日その一部の文庫本を取り出してみましたが、もう一度読みたくなるようなものではありませんでした。紙も悪いし、印字も小さく読みづらそう。

小児科医になってからは、岩波新書を中心に子どもの心理や発達さらに育児に関するものは、私の教師役でした。それ以外にも政治、経済（一番苦手な分野）、社会、歴史などにも手を出しています。医学、生物学に関するものでは「ブルーボックス」に世話

になってきました。

それだけなら現在のような状態にはならなかったでしょう。子どもの頃から「エンターテインメント」の小説が好きでしたので、最初の頃は推理小説にはまり、文庫本や新書版のものがたまり始め、あつという間に書棚があふれかえったのです。それがいつの頃か覚えていないのですが、池波正太郎と藤沢周平に出会い、今度は時代小説にはまってしまいます。

これはいけないと思い、古本屋に持ち込んでみても、10年以上も経っているものは買取りしてくれないと分かり、ほとんどの古本は古紙回収業者に引き取ってもらい、推理小説関係を処理しました。

ある日新聞に「古本買い取ります」の折り込みが入っていました。それには、但し書きとして、「文庫本」の査定は低いかとあります。しかも時々利用していた近所の古本屋が廃業してしまいました。古本屋さんは、どうやら全国的に苦戦しているらしいことを知りました。根底には深く進行する活字離れがあるようです。スマートフォンを未だに使わない、これからも使う気のないアナログ派の私の想像を超えて進行中の現象なのでしょう。

文庫本を整理したところで、私の本の整理は全く初歩的な段階にしかありません。私が一瞬とはいえ、4人いる息子のうち誰かが引き取る可能性はないだろうかと考えたのは、何とも浅はかな考えでした。親とは全く異なる分野で仕事をしている現在、私の専門に関心を持つ者がいるはずがありませんし、専門外に興味を持って買った本にさえ、関心を持つかどうか分かりません。

どう決断するかは、もう少し先送りするしかないかなというのが、現在の正直なところ です。

ちょっと話が変わりますが、老齢になってから、子どもの頃に読んでわくわくした感動をもう一度味わいたいというか、味わえるかなという気持ちで、代表として「レ・ミゼラブル」「三銃士」「モンテ・クリスト伯」を新たに買って読んでみました。結論から言いますと、子どもの頃に感じた「一喜一憂」感が、全く感じられませんでした。

今NHKで意外に人気の、「チコちゃんに叱られる」を見ていて、大人になると時間の経つのが早く感じられるのは「ときめきがなくなるから」という回答を聞いて、なるほどなと思ったものです。私の感じた「一喜一憂」感とは、まさにこの「ときめき」だったのでしょうか。

この文章を書いている間にも本は増え続けています。